

平成29年度 発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業  
(発達障害の可能性のある児童生徒に対する教科指導法研究事業)  
成果報告書

実施機関名 ( 国立大学法人 滋賀大学 )

## 1. テーマ

テーマは、「教科の学習上のつまずきなど特定の困難を示す児童に対する社会科・算数科・体育科の指導方法及び指導の方向性の在り方の研究」である。本校では、インクルーシブな教育システムを目指し取り組んできた「学年授業研修会」の授業を3教科に限り、滋賀大学の教科教育担当教員を交え、教科のアセスメントの在り方、教材・教具の開発の在り方、授業支援の在り方、授業デザインの在り方、そして、学習支援の在り方を専門的な知見から指導を受けると共に、特別支援教育担当教員から授業の受け手の児童の捉えかた・学び方について、指導を受けることで、2年次より精選された方向性を見いだしていく研究を1年次にしてきた。

## 2. 問題意識・提案背景

平成26,27,28年度は、文部科学省委託事業「発達障害の可能性のある児童生徒等に対する早期支援研究事業」に取り組んできた。本校は、全ての学級が通常学級である。だからこそ、インクルーシブな教育を目指し、場の教育から個々の教育ニーズを考えた支援教育の在り方の課題を克服するために、校長・副校長のリーダーシップのもと取り組んできた。本校が教科の研究校であることから、1人ひとりの附属小学校教員の得意教科を生かした「学年授業研修会」で、授業デザインの改善や指導の在り方の改善などを行うことにした。特別支援教育コーディネーターが、年度当初に学校行事として「学年授業研修会」を組み入れ、マネジメントを行った。学年がいつでも相談できる実務アドバイザーを配置し学年援助体制を整えていった。また授業研修会の協議会では、インシデント・プロセス法を導入し、専門の教科をもち実践研究を続けている教員が、学習する児童の姿を見取り、個の教育ニーズに合う学習支援の在り方を学びあえる絶好の機会にした。このような授業研修会を通して、教員一人ひとりのインクルーシブ教育に関する意識が確実に向上し、ICTを効果的に活用することで、教材の視覚化、学習課題の焦点化、議論の共有化を図ることができる実感できた。また、各教科の新学習指導要領に記された「合理的な配慮」について、より具体的に考える必要があるとの認識が共有された。同時に「各教科で考えていくべき学習支援とは」という問題意識が教員に芽生えた。

このような本校のこれまでの取組を踏まえれば、「教科の学習上のつまずきなど特定の困難を示す児童生徒に対する指導方法及び指導の方向性の在り方の研究」に大きな貢献をすることができる。

今年度の計画として、今まで取り組んできた「学年授業研修会」を振り返り、PDCAサイクルを意識した上で、準備段階のアセスメント、教材・教具の充実（ICTの環境整備を含む）、授業の具体的な教科指導の支援の在り方、個別の指導計画による支援策への評価を考える素地作りをしていきたいと考えた。

教科を算数科、社会科と体育科に選定した理由は、次の3点にある。

(1) 本校の平成28年度の校内研究において、子供たちに育てたい資質・能力7つのうちから各教科の本質をもとに特に重視するものを挙げたところ、算数科(探求力)、社会科(探求力、情報収集力、コミュニケーション力)、体育科(自律性、共生的な態度)とそれぞれ重なる部分はあるが異なっている。個人が抱える困難を多面的に見ることで、総合的な視点から指導の方向性が見いだされる。

(2) 算数科、社会科に関しては3年間の授業研修会で数多く取り上げられている。体育科においては研究する教員が平成26,27,28年の事業で授業ユニバーサルデザイン学会での研修を積んでおり、校内研究においても全員が体育の授業にスムーズに入るための「予備運動」に注目して研究を進めている。3教科とも、ICTを用いた授業づくりに積極的である。算数科においては、単位の学習で困難を感じる児童のために、本校独自の教具を開発し活用している。

(3) 本校の算数科、体育科を研究科目にしている教員が3名ずつと多く、大学の共同研究者も2名ずつおり研究を進める環境が整っている。社会科においては、大学の共同研究者は前附属特別支援学校長であり特別支援教育に造詣が深い。

この3つの教科が「参加」「理解」「習得」「活用」の具体的な授業デザインを描いたり、個に応じた教材・教具の開発を検証したりしていくことで、各教科の学習支援の視点や見方を他の教科にも広めていきたいと計画している。

### 3. 目的・目標

本校の今までの「学年授業研修会」で、個々の教育ニーズを考慮し授業デザインを考えた時に、全ての教科において情報収集の提示での視覚支援は、有効であることが分かった。そこで本事業においてICTの有効な活用のための環境整備をまず整えることに取り組んだ。具体的には「iPad」や「AppleTV」の環境整備をすることで、常に教材提示の時、教員が教室で視覚支援をできるようにした。

次に、発達障害の可能性のある個のニーズ(学習の準備段階)と課題や現状を把握する確かなアセスメントをすることで、学習支援のより良い在り方を考える。そこで、社会科、算数科、体育科の3教科には、どのようなアセスメントシート(レディネスシート)が有効かを考え、試行的に作成することとした。アセスメントから得られた児童の学習上のつまずきについて、教員が授業改善に生かすだけでなく、児童が自らの学習改善に生かすことができるような教科指導法を開発することにつなげていきたい。

さらに、社会科、算数科、体育科の3教科は、それぞれの教科で支援が必要な児童が行う学習を想起した「授業デザイン」を提案した中で、「学年授業研修会」で協議することとした。また、「授業デザイン」の作成と同時に、発達障害の可能性のある児童が、困難を感じずに学習できるような教具の開発も行うようにした。

考案された学習アセスメントと教科指導法や教具の妥当性は、地域の公立学校との共同研究などにおいて評価・検証していく予定である。また、大学の教員養成カリキュラムの中の「各教科の指導法」に関する科目においてICT活用だけでなく特別支援教育の視点も加えた科目を開発する課題にも発展させていく予定である。

## 4. 主な成果

### (1) 3教科の実態把握のためのアセスメント

#### ア. 社会科

社会科は、児童の生活経験により、学習が大きく左右される教科でもある。単元の学習内容にかかわる、児童の生活経験について、レディネス調査を行うことが、重要なアセスメントになると考える。

また、社会科の学習内容は、3年生から6年生にかけて、地域から日本全国、世界へとそのステージは広がっていく。しかし、一貫して、人々の営みに目を向け、その思い（苦労や工夫）をさぐっていくところの共通項を見出すことができる。前学年や前単元の学習状況、獲得した知識や技能、さらには関心・意欲について把握していくことを大切にしていかなければならない。

さらに、資料の読み取りの技能や思いの深め方について、一人ひとりの児童の学びのパターンを見ていくことが必要だと思う。

#### イ. 算数科

アセスメントを大きく2つに分けて考えた。

1つ目は、整数、小数、分数などの数の拡張にともなう四則計算の定着についてのアセスメントである。このようなアセスメントは、妥当性と信頼性が大切である。本校は滋賀県算数部会事務局をしているので、過去の研究報告集が残されている。そこには毎年実施される滋賀県内の学力調査のデータがある。その調査データを基に、様々な年度の同一問題に着目して、精選・吟味し、「つまずき診断テストの作成」を試作した。2年次の始めに、アセスメントを行う方向で話し合っている。

2つ目は、文章題の克服についてのアセスメントである。今後の課題となった。なぜなら、文章題のアセスメントについては、文章題にでてくる単位の読み替え、文章が表している状況をイメージができないことや量感の定着など児童が困難を感じる箇所が多数あるため、アセスメントの取り方に難しさが話し合われた。しかし、本年度は、量感の定着や、文章題を解くためのイメージトレーニング（絵→文→式・文→絵→式など）のアセスメントを考える前に、文章題にでてくる「単位」に目を向ける習慣をつける教具の開発をしていくことになった。（教具の開発に記載）6年生の一部を対象に「開発された定規を持っている児童」と「持っていない児童」では、メートル法の学習後の評価に差違があるか検証中である。

#### ウ. 体育科

アセスメントとして大切にしている3つの動きの習得レベルの把握。

(ア) 人と動きを合わせること（同調運動）で、無意識的に自分の動きを高めることができる。

(イ) 動きの言葉、感覚の言葉（オノマトペ）を使って、タイミングの良い動き方の習得レベルの把握。

(ウ) 遊びの量的な背景（予備運動）と、運動への変換できる力の実態把握。

以上、新しい運動との出会いの段階の技能を支えるために、「できない」という感覚をなくすことに重点を置いたアセスメントを行う。附属小学校として体育の授業を支える『学び方ハンドブック』を作成中である。

(2) 3 教科の授業デザインと具体的な学習支援

ア. 社会科の授業デザインと具体的な学習支援

学習の段階	児童のつまずき	支援策
<p>【単元の導入に関わって】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・学習問題をつくる。</li><li>・学習計画を立てる。</li></ul> <p>【実際の授業に関わって】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○学習課題を把握する。</li><li>○予想する。</li><li>○調べ,考える。</li><li>○振り返り,まとめる。</li></ul>	<p>△社会的事象に対する興味や関心をもつことができない。</p> <p>△今までに蓄積されてきている生活の経験や体験の差。</p> <p>△どのように学習を進めていけば,学習問題の解決に迫ることができるのかわからない。</p> <p>△生活経験や生活体験とのギャップを生み出すために提示する資料などから,疑問や気づきを見つけ出すことが難しい。</p> <p>△どの資料をもとに,また,何を根拠に予想をしたらよいかかわからない。</p> <p>△学習課題を解決するために必要な情報を,資料などから読み取ることが難しい。</p> <p>△調べた事柄を,ノートやワークシートに記入することが難しい。</p> <p>△調べた事柄をもとに,社会的事象の特色や意味などを考えることが難しい。</p> <p>△学習課題に対して,本時の学びをまとめることが難しい。</p>	<p>○具体的な体験や作業を取り入れたり,実物を提示したりして,考える土台を共通のものにする。</p> <p>○学級全体で,学習を進めていく順序を明確にし,見通しをもって学習を進めることができるようにする。</p> <p>○社会的事象から読み取る事柄をより分かりやすくするために,資料などの提示の仕方を焦点化し,視覚的に捉えやすいようにする。</p> <p>○できる限り,子供たち一人ひとりの思いや考えを受け止めることができるように,発表に対して寛容的な雰囲気をつくり出す。</p> <p>○資料のどこに着目して,どのように考えたらよいか,明確にする。</p> <p>○資料から読み取った情報や,調べた事柄を友だちと共有したり,ワークシートに記入したりできるようにする。</p> <p>○発問を工夫し,より具体的な思考に迫ることができるようにする。</p> <p>○5W1Hをもとに,学習課題を設定できるようにし,何について考えたのかを明確にできるようにする。</p> <p>○単元を通した学びの足跡を教室に掲示し,学習を振り返ったり,まとめたりする際に参考にできるようにする。</p>

## イ. 算数科の授業デザインと具体的な学習支援

(本校の児童の実態)

- ・注意欠陥：興味・関心の有無が、学習活動の取り組み方に大きな影響が出る。
- ・こだわりの強さ：1つの意見や考え方に固執して、それとは異なるものを受け入れるのに抵抗がある。
- ・協調性の未熟さ：自己主張が強い一方で、傾聴することの難しさがある。

段階	児童に起こりうる困難さ	指導の工夫の意図, 手立て
段階 問題をつかむ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数量や図形に関する抽象的な場面や条件を提示するだけでは、具体的な問題場面と結びつけてイメージしにくく、問いの発生が難しい。</li> </ul> <p>⇒抽象から具体へ変換する困難さ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題場면을1つ1つ段階的に捉えるだけでなく、問題場面からわかることや気づくことを見つけさせ、共有させながら、じっくりと漸次的に問題場면을捉えていくようにする。</li> </ul>
段階 見通しをもつ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・確かな条件把握がなされずに、自力で問いを発生させたり解消したりするための推進力が充分ため込まれない。</li> </ul> <p>⇒課題によって変動する解消への意欲。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の課題解決に関わる既習事項の確認や、類似した活動から学んだ経験の交流を通して、「自分にもできそうだ」という自信と「あの時の解き方と似ているな」というおおまかな見通しがもてるようにする。</li> </ul>
自力解決の段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見通した解消方法を既習事項と結びつけながら、自分の力だけで順序立てて考え、具体的に表現する難しさ。</li> </ul> <p>⇒考えを表現するツールを選択したり表したりする難しさ。</p> <p>⇒既習の解決方法を本時の学びに応じた形へ高めていく難しさ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問いの解消に向かっていく児童の思考や意欲を保つために、虫食い型のワークシートを用いたり、何度でも考えを表わすことができるノートやワークシートの使い方を提示したりする。</li> <li>・まずは、「できかかっている」ことをしっかりと評価して、児童の自己肯定感を高め、新たな情報を受け止める心のゆとりを持たせる。</li> </ul>
段階 集団で本質に迫る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題の正誤という結果にこだわることで、多様な考えから共通点や相違点を見つけることが難しく、合理的な考え方を見出しにくい。</li> </ul> <p>⇒事象を関連づける難しさ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童が複数の解決方法を考えられる問題を用意する。さらには正誤にかかわらず、個々の解決方法に目を向け、そのよさを児童たちで価値づけていけるようなめあてを児童と共に設けるようにする。</li> </ul>
の発生 自身の振り返りと問い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結論を出すことに重点を置いていると、新たな問いの発生や学びの自己認知が実現しにくい。</li> </ul> <p>⇒本時の学びへの気づきや疑問から、新たな問いへとつなげる難しさ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の中で生まれた児童の気づきや新たな問いを振り返られるように、「何を学んだのか」「どんな疑問が出て来たか」という視点で、児童の意見を板書に整理して記録する。</li> </ul>

算数的な表現活動を支援するために、「iPad」の活用は有効である。

課題や発表を視覚的な提示や具体物操作の動画など表現を支える道具として効果的である。また、「エアードロップ」による仲間からの解き方のヒントの送信に活用できる。

## ウ. 体育科の授業デザインと具体的な学習支援

段階	子供の困り感・つまずき	支援
できる わかる	<p>・不器用で、動きにぎこちなさが見られ、動きの習得に時間がかかる。</p> <p>・どんなふうに分を動かしたらよいかかわからない。</p>	<p>◇運動を構成する「感覚・技能」を明らかにした上で、以下の支援を行う。</p> <p>①「最も大切だと考える感覚・技能」を繰り返し経験できる場の設定。 →遊び感覚で誰もが取り組める易しい運動として提示し、繰り返し行う時間を十分に保障していく。 &lt;予備運動の精選&gt;</p> <p>②学習内容の焦点化と運動のしくみの明示。 →運動のもつ構造について、リズムやイメージを元に共通言語(合い言葉・オノマトペ)としてわかりやすく提示する。</p> <p>③多様な感覚にアプローチできる環境の設定。 →映像資料や示範を通して、めざす運動を視覚的(イメージ)、聴覚的(リズム)につかめるようにする。 →仲間と動きをあわせて動くことを取り入れ、動きを高められるようにする。 →仲間のお手伝い(補助・口伴奏)や補助具の使い方を具体的に示し、活用を設定する。 →個々のめあてに応じた易から難への多様な場の設定。</p>
参加する	<p>・運動に対する負の感情をいだいており、活動に向かうことができない。</p> <p>・活動の見通しがもてず、集中できない。</p> <p>・自分の感情をコントロールできなかつたり、一つのことにとこだわってしまつたりして、仲間と協力して活動できない。</p>	<p>①安心感をうむマネジメント。 →子供の実態に応じて、課題となる運動・技の難易度を調整する。 →痛みや恐怖心を軽減する用具(教具)や場を工夫したり、グループのメンバーを配慮したりする。</p> <p>②見通しをうむマネジメント。 →学習の流れや場を視覚資料で明示したり、子供の動線に目印をつけたりする。 →単元を通して、学習の流れや活動の場ができるだけ同じになるように工夫する。</p> <p>③汎用的な力の明示。 →単元横断的に、繰り返し使う学習の方法を「体育の学び方」として明示する。</p> <p>④感情処理の作法の明示。 →ゲーム中のかかわり方、負けたときのふるまい方や感情の処理の仕方について具体的に示す。また仲間に対する肯定的な言葉・ふるまいを価値づけ全体で共有していく。</p>

### ※ 受容的・共感的な雰囲気につながる教員のかかわり

→運動の結果(「できる・できない」「勝つ・負ける」)だけを評価するのではなく、少し難しいことやできないことに挑戦していく過程での、「考える・試す・みる・かかわる」子供のよさや伸びを認めていくようにする。

集団の雰囲気作り。結果だけではなく、子供のよさや伸びを認めていくようにする。



## 5. 取組内容

教科の学習上のつまずきなど特定の困難を示す児童生徒に対する指導方法及び指導の方向性の在り方の研究

### 教科指導法研究事業運営協議会の組織及び設置

〈組織〉代表 校長・副代表 副校長

事務局 特別支援教育コーディネーター・iPad 関係支援教諭

教科担当者 算数科主任・社会科主任・体育科（研究主任）

実践研究者 各学年の教職員（学年授業研修会を実践研究の場とする）

特別支援教育アドバイザー2名（児童把握・指導案検討・支援指導の助言）

〈支援組織〉

◇滋賀大学教育学部 教科教育〔数学・社会科・保健体育〕 障害児教育

◇滋賀大学教育学部附属特別支援学校 副校長・特別支援教育コーディネーター

◇滋賀県教育委員会 幼小中教育課・保健体育課

◇大津市教育委員会 学校教育課

〈実施計画〉

6月21日(水)

- ・教科指導法研究事業運営協議会の組織会議(1年間の見通しと役割)

6月～8月

- ・3教科の実態把握アセスメントと教材教具の作成。(1年次作成のみ)
- ・インクルーシブ教育に関する教員研修。(7月23日 LD学会近畿支部長)
- ・個別指導計画による学校対応の特別な支援ニーズの必要な児童の把握。

〈学年授業研修会の抽出対象児童の把握と学校支援体制と学年支援体制の実施〉

9月～

- ・(行動面)支援レベルに応じた児童の短期目標の取組。
- ・(支援の実施と再検討)
- ・(学習面)長期目標を意識した日常の授業での取組。

学年授業研修会による支援策の検証授業。(事前で指導案検討会も実施)

①	11月 24日 (金)		放課後	3年生支援研修会
②	12月 1日 (金)	6校時	国語科・放課後	4年生授業研修会
③	<u>12月 8日 (金)</u>	<u>6校時</u>	<u>社会科・放課後</u>	<u>5年生授業研修会</u>
④	12月 13日 (水)	5校時	国語科・放課後	2年生授業研修会
⑤	<u>12月 15日 (金)</u>	<u>4校時</u>	<u>算数科・放課後</u>	<u>1年生授業研修会</u>
⑥	<u>12月 20日 (水)</u>	<u>5校時</u>	<u>体育科・放課後</u>	<u>6年生授業研修会</u>

本年度の事業対象教科は、授業研修会の下線③⑤⑥ですので、組織(支援組織)の協力を得て、授業研修会を行うと共に、「指導方法及び指導の方向性の在り方」について、話し合う会議日と考えている。国語科については、他の教科に広げるといふ観点から、授業実践、授業研修会を行っていった。

※滋賀大学教職大学院特別支援実習の現職教員も参加し、広く支援方法を探る。

2月20日(火)

教科指導法研究事業運営協議会の集約会議(成果と課題)

★1. 算数科「ひきざん～引けないよ～」 11月30日 授業支援検討会  
(算数科の授業デザインの具現化に向けて)

★2. 対象とした学校, 学年 滋賀大学教育学部附属小学校 第1年生

★3. 対象とした児童生徒のつまずきの状況

[A児]・自分が面白いと思わないことには, 集中できない。

- ・目立ちたい気持ちが強く, 自分が発表できる機会が少ないといじけてしまうことがある。
- ・言葉で理解するのに少し時間がかかる。
- ・字や計算などを雑に処理してしまう。
- ・こだわりが強く友だちとの考えを受け入れられないことがある。
- ・待つことが難しい。

★4. 教科における学習上のつまずきに対する方策

(11月30日の授業支援検討会で検討した内容)

- ・問題に関心が持てるように条件不足の問題提示をする。
- ・条件を満たす複数の答えがあり, 解き方がある問題設定をする。
- ・解き方が話しやすいように, 具体物の操作を取り入れる。
- ・意欲的に解決方法を発表できるホワイトボードやタブレットなどを準備し, 視覚的に発表内容が表現的できる環境を整え, 算数的な表現活動を支援する。
- ・多くの友だちの考えを交流できるように, 十分な交流時間を確保し, 活躍できる場面設定をする。

★5. 実施した支援内容

[A児・B児]

- ・「ゆ」 $12-8=4$  「き」 $14-9=5$   
「る」 $13-6=7$  「ま」 $11-3=8$  の学習課題は児童の興味関心ひいた。
- ・「だ」の答えが6になる式の目当てが全ての児童に明確になった。だから, 意欲を持って学習ができた。また, 発表の機会を確保してあげたり, 活動中の頑張りを認めてあげたりできた。
- ・自分のペースで学習が進められるように, 幾つかの答えがある問いをすることで, 安心して学習を進められるようにする。

[B児]

- ・不安にならないように, 計算カードなどの活用等も許可してあった。

[A児]

- ・複数の式を共通の着眼点で並び替えたりしても自分たちで問いを生み出し, 学習意欲が持続していた。

★6. まとめ

[A児]

- ・答えが「6」になる式は複数ありますが, 初めは思いつきで書いていたのですが, 少しずつ規則性に気づくと, 全部消して書き直している姿に学習への意欲を感じた。また, 自分の中の問いと共感して, 友だちの話を熱心に聞こうとしていた。

[B児]

- ・不安がらないように十分な時間と個別指導がしっかりとされていた。

★1. 体育科「自分の動き方はどうなっている？～体の使い方に迫る～」

B:器械運動 ア:マット運動

12月7日授業支援検討会

(体育科の授業デザインの具現化に向けて)

★2. 対象とした学校, 学年 滋賀大学教育学部附属小学校 第6年生

★3. 対象とした児童生徒のつまずきの状況

- [A児]・説明を理解し、行動することが難しい。
- ・できないことに対して、作業が進まない。
  - ・理解ができないことにイラ立ち、それ以上の作業が進まなくなる。
  - ・集団の空気を読んで活動することが難しい。
  - ・運動の得意なことが長所であるが、集団では十分な力が発揮されない。

★4. 教科における学習上のつまずきに対する方策

(12月7日の授業支援検討会で検討した内容)

- ・集団の説明後、個別指導する。
- ・スモールステップで段階を踏んだ説明をする。
- ・落ち着くまで待ち、こだわっている部分を一つ一つ紐解き支援する。
- ・仲の良い集団に入れたり、無理矢理集団で活動する取組を増やしたりして、そのような場をたくさん経験させる。
- ・スピードスケートをしていて、運動については理解がしやすい。

★5. 実施した支援内容

- ・教員の声かけ。A児のいるグループに対して「くるんか、くーるんどっちでやっているの?」「どんな感じ?合っている?」などと子供に問いかけ、「あっているかどうかははっきりしない」という子供の内にある言葉を引き出し確認する。
- ・視覚支援。「じゃあ、iPadでとって見たら自分たちの姿が見えるよ」と映像の活用を促している。教員からの指示されたものではなく、子供の困り感に「今ここ」でフィットした方法を提示し、それを見える化(明示)していくことで、その効果とともにその方法が子供のものになっていくのである。
- ・学び方を提示するだけでは、その意味が分からないので、今回のかかわりのように引き出し価値づける。(単元横断的に繰り返すことが大切)
- ・A児のグループは、動きがなかなか合わない時に回転はせずに歩きながら合わせてみるという活動を取り入れていたのである。A児にわかりやすいようにリーダーの子が提案し試して上手くいった方法であった。既習の学習で、「できない時はやみくもに繰り返すのではなく、易しいやり方(場所)で確かめてみる」ということの支援を学び、本時ではそれを活用している姿だと捉えることができる。

★6. まとめ

「できるかできないか」を楽しむ受容的・共感的な雰囲気づくりができた。つまり、運動の結果だけを評価するのではなく、少し難しいことやできないことに挑戦していく過程で「考える・試す・みる・かかわる」などの視点で、互いによさや伸びを認めていける学習課題になっていた。この授業でのA児のいるグループの友だちの動きは、技能差がはっきりと目に見える体育科だからこそ、「できなさ・わからなさ」に寄り添う学級の雰囲気・価値観の醸成に果たす役割が非常に大きいものである。

★1. 社会科「日本の工業の特色～工業のさかんな地域～」12月8日検証授業  
(社会科の授業デザインの具現化に向けて) 11月17日授業支援検討会

★2. 対象とした学校, 学年  
滋賀大学教育学部附属小学校 第5年生

★3. 対象とした児童のつまずきの状況

- [A児]・今することがわからず、思ったことを口に出してしまう。
- ・しようとしていることが上手くいかないと、集中を続けることが難しい。
  - ・挙手したときに当たらないと、その後授業に参加できなくなるときがある。
  - ・自分の思いが教員、友だちに伝わらないと授業を続けることが難しい。
- [B児]・何をすればよいかわからず、何もできないことがある。
- ・自分の考えに自信がもてず、ノートに書いたものを消し板書を写す時がある。

★4. 教科における学習上のつまずきに対する方策

- ・本時に考えさせたい工業地域・地帯の立地条件に目を向けられるように、海を隠した工業地域・地帯の写真を提示し、何が隠れているのか予想する活動を取り入れる。
- ・日本の衛星写真に工業地域・地帯のある場所をシールで示し、地形にも目を向けられるようにする。
- ・意欲的に調べられたり、グループ交流時にランキングを話しやすくしたりするために、考えた特徴を付箋に書く活動を取り入れる。
- ・工業地域が多く集まる場所の特徴について、活発な交流を促すためにランキング形式で考える活動を取り入れる。
- ・「工業地域が集まっているのは」という書き出しを示し、振り返りを行うことで、書く内容に困らないようにする。

★5. 実施した支援内容

- [A児]・学習の進め方を板書しておく。(①一人学習②班学習③全体での学習)
- ・机間指導中に声をかけることで、安心して学習に取り組めるようにする。
  - ・つぶやきを適宜拾ったり、言いたかった思いを机間指導の時に聞いたりする。
- [B児]・学習の進め方を板書しておく。
- ・机間指導中、今考えていることや、困っていることを聞いたり、やろうとしていることを認めたりする声かけを大事にする。

★6. まとめ

- [A児]・学習の進め方が、少しずつ自分の考えに自信が持てる学習になっていた。
- ・座席や仲間への合理的な配慮ができており、安心して学習に取り組めた。
  - ・沢山の学習活動の場面で、A児のサインを見逃さず、支援する姿があった。
- [B児]・やや、自分の関心事でない内容に、意欲的な姿がみられない。魅力のある提示や見方のポイントや、具体物の提示など課題をつかむ段階に支援の必要があった。班学習への配慮は有効に働いていた。

## ★7. 3 教科のまとめ

### ①教科における学習上のつまずくポイント

児童の実態から特別な支援の必要な児童の特徴を考えることができた。簡単にまとめると下記の表のような児童の特徴であったことを3教科の実践の中で見いだせてきたと考える。

特別な支援の必要な児童の短所にあげられている内容は、未学習のことを身につけていくために必要な学習に困難さが見られることが分かった。しかし、実務アドバイザーの「短所は、長所と表裏一体、1人の人間が持つ特性です」との言葉に、短所をどうにかするのではなく、長所を生かした合理的な配慮を試みる支援策が数々考えだされた。

長所	短所
<ul style="list-style-type: none"><li>・単純な記憶力には優れている。</li><li>・1つのことから、広げて考える。 (迷路を作るのが好きである。)</li><li>・知識欲があり、こだわりを持って調べて、難しい言葉で説明したり指示したりする。</li><li>・ワンパターンの行動を速く身につけ、繰り返す力がある。</li><li>・理解力に優れ、事前に話をすれば、しっかり準備し、見通しをもって行動できる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・こだわりが強い。その子にかぎって、手先が器用で、論理的に考えるので巧みである。</li><li>・既習の活用や比較、組み合わせるなど、多様な考えをすることが苦手である。</li><li>・多くは手先が不器用な子が多い。</li><li>・刺激に過敏であったり、運動や身体表現が、やや、ぎこちない。</li><li>・自分で計画を立てることが苦手である。</li><li>・想定外なことが起こるとパニックになる。</li></ul>

※学習障害の児童が数人在籍している。

学習障害の児童については、幾つかのイメージトレーニングのスキルで対応している。

### ②つまずくポイントにおける効果がある指導方法・内容

長所活用型の指導方法は効果的であった。3教科とも、対象児童が長所を活用できるように、環境整備段階から授業デザインに至るまで、細かい合理的配慮がなされていた。例えば、視覚支援でも、ただ視覚的な教材を黒板などに貼るのではなく、(1) 見るべきポイントを絞れるようにする支援や、(2) 処理方法の特性に配慮し、見せれば意図をくみ取る処理力を持つ児童と、1つ1つ段取りを提示しなければ処理できない児童の違いを把握し、学び合いの観点から、学習の相互補完できるグループを構成する支援である。後者には、本校の校内研究の1つの柱である「学びの底流作り」が生かされている。

また、教科の本質に由来する困難さへの配慮もあった。例えば算数科では、数量、図形の理解における発達段階の違いや認識、レディネスを考慮して、教科書をもとに構成された「スタートラインはどの子も同じ」という問題場面の提示が授業の導入として有効であった。さらに、タブレットを活用した様々な提示の方法は、児童自らが体験学習しているか如くに有効に働いていた。つまり、教科の本質を踏まえることで実践できる指導方法の工夫である。

体育科においても、身体感覚感性を磨き、獲得していく授業デザインは、体育科の本質を知っている教員だからこそその学習であった。

### ③事前につまづかないようにするための指導の工夫・内容

事前につまづかないようにする指導の工夫は、多岐にわたる。このような指導の工夫は、教材研究段階での授業デザインの考案によってうみだされるものであることが分かった。学年授業研修会に至るまでの授業デザインの中に様々な事前の配慮が考えられていた。例えば、教材の見せ方の工夫、学習課題の明確化、そして学習方法の多様性と個別支援する時間の確保、さらにはそれらをなしえるための支え合う学習集団の学習形態が工夫されていた。

### ④通常の学級の授業における有用な指導方策

本校における実践研究は、全て通常学級で行われている指導である。

## ★8. その他

### ①本事業のために教育委員会が実施した研修・指導主事の訪問等

本校は、国立大学法人滋賀大学の附属学校であり、直接的には、県・市教育委員会の指導の下にはないが、常に連携協力をいただいている。研究発表協議会等の授業研究会においては、授業づくりの段階から、検討会を行い、指導をいただいている。今回の事業においても、運営委員のメンバーに、県教育委員会の教科の指導主事3名と大津市教育委員会の特別支援の指導主事1名に参加いただいている。

具体的には、6月21日（水）の運営協議会において、県教育委員会幼小中教育課参事にお越しいただき、社会科など、教科の側面から授業デザインにかかわる授業づくりで大切にしなければいけないことなどについて、お話をいただいた。また、授業のベースとなる、学級づくりの重要性と、児童の学ぶ意欲をいかに高めていくかについて、具体的なご指導をいただいた。

本事業にかかわる研修会として、7月25日（火）に、インクルーシブ教育に関する教員研修会として、特別教育支援士資格認定協会理事の小西喜朗先生（元滋賀大学教育学部附属特別支援学校副校長）をお招きし、「附属学校園で困り感のある児童・生徒の関わり方と指導支援について～インシデント・プロセス法からアセスメントや支援の方法を学ぶ～」というテーマのもと、教職員研修会を実施した。具体的な児童の事例をもとに、情報の収集・整理・共有の方法から、目標や支援の立て方について、学ぶ機会を持った。また、ケース会議で大切にしなければならないことや、医療機関等外部との連携の在り方についても、指導をいただいた。

### ②本事業の月別の主な実施内容

- |          |                                     |                                     |
|----------|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 6月21日（水） | 第1回運営協議会                            | ・研究の概要、年間計画の確認<br>・授業研修会の持ち方についての協議 |
| 6～8月     | 発達障害の可能性のある児童のつまづきの把握               |                                     |
| 7月25日（火） | インクルーシブ教育に関する教員研修会                  |                                     |
| 9月～      | 新個別指導計画の実施と再検討<br>特別支援スーパーバイザーによる助言 |                                     |

11・12月 授業研修会及び教職大学院特別支援実習の開催

11月	24日（金）	3年生支援研修会
12月	1日（金）	4年は組<国語科>授業 / 4年生授業研修会
12月	8日（金）	5年い組<社会科>授業 / 5年生授業研修会
12月	13日（水）	2年い組<国語科>授業 / 2年生授業研修会
12月	15日（金）	1年ろ組<算数科>授業 / 1年生授業研修会
12月	20日（水）	6年ろ組<体育科>授業 / 6年生授業研修会

2月20日（火） 第2回運営協議会 ・一年次の振り返り  
・二年次に向けて

## 6. 今後の課題と対応

「教科の学習上のつまずきなど特定の困難を示す児童生徒に対する社会科・算数科・体育科の指導方法及び指導の方向性の在り方の研究」を行ってきた。

3教科とも、まず、児童実態把握のアセスメントの作成を行った。児童観察などを通して行っていたチェックリストによるアセスメントから、教科独自の信頼性と妥当性のあるアセスメントを作成することができた。また、教材、教具の開発には、今までに3教科が独自に考えていた1つを作成することにした。アセスメントや教材教具の開発は、2年次年の研究で活用し、効果を確かめたい。学年授業研修会の実証研究は、これまでに社会科の検証授業の5年生授業研修会が行われている。また、算数科や体育科も、教科別指導案検討会が終わり、検証授業の段階にきている。各教科とも、対象児童の特性に応じた授業デザインと合理的な配慮が様々な所にちりばめられている。教科の本質から考えると、指導法には、その教科独自の切り口があり、その教科の指導の在り方がある一方で、指導・支援の在り方には、個々の教員の特性も重要であり多様な指導法・支援法が必要である。

授業研修会のベースにある会議の持ち方であるインシデント・プロセス法の成否は司会に左右されることが多い。司会者に力量があれば、参加者の個性を引き出し、1人ひとりの教員が身につけてきた特性を持つ児童への指導法を引き出せ、指導法の改善を深く考えるきっかけとなった。

3教科とも共通して考えていたことは、授業デザインの段階での学習形態による配慮である。集団で学習する段階と個人で学習する段階にわけて学習中の特性によるズレを集団で修復する場面と個別指導する場面の区別をはっきりさせていた。また、学習のプロセスにおいて、学習の導入時に児童の処理方法の特性による情報入力ズレが起こらないように配慮されていた。そのことにより、1人ひとりに学習課題の明確化を図ることができた。また展開の段階では、児童の感情の起伏の特性を考慮したり、考えを広める学習と考えを深める学習の両方をうまく取り入れたりと学習展開に工夫されていた。まとめの段階では、パフォーマンス評価のように個人がどのような学習過程をしてきたかという情報出力をさせることで、個人に学習過程を想起させて自己評価の振り返りをしていった。

このように、児童の特性と教科の特性といった様々な違いをしっかりと意識して、両方の特性を生かす授業デザインや授業展開を楽しく仕組める教員による授業実践の研究が、インクルーシブな教育システムを開発できる基盤となる。また、障害の特性をしっかりと捉え、その児童の困り感と学び方を理解し、情報入力・学習過程・情報出力・自己評価の学習場面を支える指導法により、自己肯定感や自己有能感を高め学習に向かう行動へと高めていくことが大切である。

今後は、会議の中で出された実務アドバイザーの「特性を持つ児童が、教材に出会い、したいように働きかけることが、学習したことに結びつく「夢のような仕掛け」の開発できる教員がいたら、全ての児童が救われるだろう。」という言葉をかみしめて私たち教員集団は、専門家の指導の下、さらなる「夢のような仕掛け」の指導法の開発に努めていきたい。

## 7. 指定校について

(小学校)

指定校名： 滋賀大学教育学部附属小学校												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	104	3	104	3	104	3	102	3	99	3	98	3
特別支援学級	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
通級による指導 (対象者数)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	校長	副校長	主任教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員	特別支援教育 支援員	スクール カウンセ ラー	その他	計
教職員数	1	1	1	22	1	0	5	5	0	(1)兼任	1	37(1)

## 8. 問い合わせ先

組織名： 国立大学法人滋賀大学

- (1) 担当部署                      総務課総務係
- (2) 所在地                        滋賀県彦根市馬場一丁目1番1号
- (3) 電話番号                      0749-27-1005
- (4) FAX 番号                      0749-27-1129
- (5) メールアドレス              ssyomu@biwako.shiga-u.ac.jp